



令和六年

頌春



令和六年、新年明けましておめでとうございます。

皆様には、ご家族揃って、穏やかな新春を迎えられたこととお慶び申し上げます。

昨年の新年の挨拶を読み返したところ、今年も昨年と同様に、雪のない元日を迎えました。そして、昨年を書きましたが、ロシアによるウクライナへの軍事侵攻に続き、昨年はイスラエル軍によるガザ地区への軍事侵攻など、今の時代には考えられない悲惨な戦争が広がり続いています。

そのような中で新年を迎え、多くの人達が気持ち新たに幸せな年になることを願って迎えた元日でしたが、石川県能登半島を中心として発生した大地震。翌日の羽田空港での大事故と、心痛めるような出来事が起こりました。継続する時間の流れの中で、たまたまこの日に起きた出来事ではありませんが、新しいスタートを挫かれる思いになる方も多いと思います。あらためて、被災された方々には、心よりお見舞い申し上げます。

さて、昨年は、コロナの扱いが緩和され、日常の生活が戻りはじめ、宿南地区自治協議会の取組みも、運動会と文化祭が開催されたことは、大きな一歩だったと思います。4年ぶりに取り組む大きな行事だけに、体育部、文化部の皆様には慣れない中で、力を合わせて運営して頂いた事には大変感謝いたします。このように陰で活躍して下さる方があって、地域のコミュニティーが成り立っている意義を改めて皆様と共有していきたいと思えます。

人生は台本のないドラマです。人はいろいろな人との出会いや経験によって、次のドラマが展開されます。ですから、宿南地区での様々な行事に、世代を超えて多くの方々が参加する経験は、これからの私達自身の人生や住む地域のあり方に繋がって行くものと考えています。

昨年の文化祭では、子供達が参加できなかったことがとても残念でしたが、終盤には、参加された皆様と今までは違った一体感を感じることができました。そして、その後新たな展開の兆しも見えてきました。この動きは、今年の宿南が更に楽しい地域になっていきそうな気がしています。ここに住む一人一人の皆様が、失敗を恐れず前向きに一歩足を踏み出すことで、未来の宿南が更に住みやすく元気で活き活きとした地域になる事と信じています。

今年一年頑張ってくださいませよう。

本年も皆様のご理解とご協力を賜りますようお願いしつつ、宿南地区の皆様のご健勝とご多幸を祈念しまして、年頭のご挨拶とさせていただきます。

身近で見られる植物 ③②

水仙（ニホンズイセン）〈ヒガンバナ科〉

今年の冬は雪がなく、庭先では水仙の花がいっぱい咲き出しました。写真の水仙は古くから日本に自生するニホンズイセンと言いますが、原産地はスペインや北アフリカの地中海沿岸だそうです。人が持ち込んだのではなく、球根が海を流れて日本に到達したらしく、水仙が群生している日本国内の自生地が越前海岸など、いずれも海岸近くに集中しているのもそのためようです。学名は「ナルキッソス」で「ナルシスト」の語源になっています。何故か？それには物語があるので調べてみて下さいね。



お知らせ
1月31日（水）各部会 反省会並びに来年度に向けて
2月 3日（土）節分 恵方「東北東やや東」
2月24日（土）第18回ボウリング大会（チラシ配布）

クリスマス会開催 ❄️

12月24日（日）福祉部主催でクリスマス会が行われました。子供からシニアまで地区の皆さま55名の参加がありました。

レインボーH&M様お二人のサクスクーボード演奏が始まり、特別参加でサクスクデュオ、ホルンも加わってトリオ演奏もあり、終わりに「きよしこの夜」を全員で歌いました。約1時間の演奏会はとても素敵なひとときとなりました。

ビンゴゲームでおおいに盛り上がり、最後にショートケーキやお茶菓子を食べて楽しい時間を過ごし、多世代交流ができました。



草庵先生紹介

日記 59



幼い草庵は長兄の子定に読み書きなども教えられ可愛がられた

宮崎和夫さん作

青谿書院を訪れて池田草庵と最もよく話をしたのは、草庵の長兄ではなかったか。

「長兄が来る。しばらく対話。夜が更けてから寝る（弘化4〈1847〉年6月11日）このように長兄と「対話」「だんらん」「小酌」したことなどが繰り返し日記には書かれている。草庵は幼年ころからずっと長兄を尊敬しており、相談相手でもあった。

草庵は4人兄弟の3番目、長兄とは12歳離れていた。草庵が10歳の時、母親が病気で亡くなり、父親も病弱であった。そのため一家離散のような形で次兄や弟は、浪華（大阪）に奉公に行くことになった。しかし、草庵は長兄の勧めなどもあり、真言宗の満福寺（養父市十二所）というお寺に入り、小僧としての生活を始めた。お寺に入った草庵は、そこでよく勤め、住職にも可愛がられ、期待されるようになっていった。しかし、18歳の時、儒学者相馬九方の講義を聴く機会があり、感銘を受けた草庵は、自分はこのままお寺での道を進むべきか悩み始めた。

その頃、長兄に宛てた手紙がある。「私は不幸せであった。幼いころに父母を亡くし、すがるものもなかった。そんな私を兄さんが可愛がって育て、一人前にしてくれた。私は、読書を好み、いろいろな術やわざを習った。しかし、こんな私には仏の道より良いもの見つからず、ついに出家した。そして、今である（池田草庵先生著作集「與兄子定」から）

長兄は孫左衛門という本名であった、子定という号も用いていた。手紙は長兄に感謝しながら、さらに相馬九方の講義を聴いてから新たな道に進みたいという願いが出てきたことを書いている。「今の私はどうしても僧として生きていくことに満足していません。心ひそかに期するものを持っています。私は愚かであるが、発奮してこの志を遂げたい」（前掲書から）

この後、草庵は「心ひそかに期するもの」に従い相馬九方の後を追ひ、恩義ある満福寺を出奔したのである。

池田草庵先生に学ぶ会